

---

# レギオンの将

子儀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レギオンの将

### 【Nコード】

N7976Z

### 【作者名】

子儀

### 【あらすじ】

嵐の夜が明けてみれば、昨日までの街並みは姿を消し、一面の森が広がっていた。家ごと異世界に流されてしまった青年は、日々を過ごすうちに自分が奇妙な力を得たことに気づく。RTSの面白さを表現できるか挑戦します。基本的に旅をしない異世界譚。

## 01話

旗中 将貴ハタナカ マサキの目覚めは最悪だった。

「……うー……」

がんと響く頭痛をこらえ、のっそりと起き上がる。

昨晩から派手に吹き荒れていた台風のせいで眠りでも浅かったのだろうか。家も妙に軋んでいたような気がする。

ちよつと睡眠時間が減るだけで体調を崩す身体が憎い。台風の間  
の鬱憤を晴らすかのように、カーテンの隙間から無駄に元気に差し  
込む日光が恨めしい。

元々あまり明るいのは苦手なのだ。締め切ったカーテンはそのま  
まに、トイレに向かった。

先祖がちよつとした地主だったということでも無駄に広い旗中家は、  
祖父母が亡くなり、後継であつた両親が仕事の都合で海外生活を余  
儀なくされ、通っている大学が近いという理由で将貴に管理を任さ  
れている。正月は親戚が集まり賑やかな自宅も、正直一人では持て  
余している。

体調が優れないときにこの長い廊下を移動しなくてはならないの  
は億劫だし、トラブルが発生したときの対応が厄介なのだ。

特に今日のように。

「ん？」

パチンパチンとトイレのスイッチを切り替えるも、一向に電気が  
点く様子がない。

思っていたよりも前日の台風はひどかったのか、停電であればは  
やく復旧してくれればいいが。

そんなことをうまく働かない頭でばんやりと考えつつ、用を足す。  
手を洗おうと蛇口をひねったとき、今度は水も流れないことに気が  
ついた。

（そんなに台風はひどかったのか……）

朝からトラブルの連続にうんざりしつつ、居間へと向かう。

（庭は大丈夫かな）

母屋は数年前に改築したから余程じゃなければ大丈夫だと思うが、明治の頃からあるという蔵は正直心配だ。以前に地震が起きたときは中の棚が一部壊れて大変な目にあつた。

とりあえず様子を見るつもりでカーテンを開け、庭の向こうに目を向けた将貴は、諸々のトラブルは、目の前にある光景の余禄であつたことを悟つた。。

庭を囲む背丈をわずかに越える、敷地を囲つた塀。

昨日までその向こうに見えていた、見慣れた街並みは姿を消し……一面の森が広がっていたのだつた。

## 02話

「……ないわー」

思わず呟きつつも、意外に自分が冷静であることを将貴は感じていた。それは一種の防衛反応なのかもしれない。だが、何が起きているのかを確かめる必要がある現状では、それがありがたかった。とりあえず外に出てみよう、と考える。

目の前にある窓からでは高い塀に遮られて、庭の一部と立ち並ぶ木々の上の方しか見えない。どの程度の異常かが、確認できないのだ。

2階に上がるのもいいかもしれないが、周囲をぐるりと見て回るためには部屋をいくつか回らなくてはならず、面倒なのでやめた。

ここからすぐに外に出ることも出来るが、塀の外に出るには結局玄関前を通るので、ひとまず玄関にまわり靴に履き替えることにした。

少し迷ったが、普段使っているスニーカーを履くことにした。塀の向こうに見えた森がもしも続いているのであれば、しまい込んでいたトレッキングシューズを引っ張り出す必要があるかもしれないが、とりあえずは塀の向こうをぐるりと1周してみて、それから考えようと思う。

ドアノブに手をかけ、そっと押し開ける。

気圧差でもあったのか、ドアの隙間から外の空気が吹き込み……息を吸った瞬間、将貴は喉が燃え上がったように感じた。

「ぐっ……！」

熱はそのまま胸に燃え移り、肺を焼く。

血管に取り込まれ、心臓が激しく脈打つ。

忘れていた頭痛がぶり返し、思考する余地を奪う。

荒い息を継ぐことで、さらなる熱が取り込まれる悪循環に、耐え切れず膝をつく。

視界が明滅し、大きく咳き込んだあと、将貴はその意識をゆつくりと手放した。

### 03話 復調

将貴が意識を取り戻したのは、太陽が天頂にさしかかるうかという時だった。

玄関タイルの冷たさを肌で感じ、自分がうつ伏せに倒れていることに気づく。

「……………ごほっ……………」

喉の奥に違和感があるような気がして二、三度咳をしてから、意識を失う直前のあの体の痛みが消えていることに気がついた。朝起きたときから続いていた頭痛も、きれいに消えさっている。むしろ普段より調子がいい程ではないかと感じる。

先ほどの異変は、ドアを開けた直後に発生した。ということは外に有毒なガスでも溜まっていたのだろうか。朝の不調も、部屋の換気口あたりからわずかに外気が入ってきていたのかもしれない。そうであれば、外に出るのは非常に危険だと考えるのが正しい判断なのかもしれない。

だが。

将貴は開いたままのドアから、外へ目を向けた。

開きかけた所に寄りかかったため、そのまま押し開いていたようだ。そして倒れている間、将貴の体をストッパー代わりにして、ずっと開きっぱなしになっていた。

（毒ガスか何かだったら、とつくに死んでるはず……………か）

少なくとも、今は外に出ても問題はないようだ。

異変の原因がなんだったのかは分からないが、有毒なガスが流れてくる事があるのならば、長時間外に出るのは危険かもしれない。

一瞬そう考え、

（いや、それはないかな）

すぐに取り消した。

一呼吸であれだけの反応をする気体が毒であれば、今現在体に何

の不調もないことがおかしい。少なくとも倒れた時点で今のよう  
にドアが開いてしまったのであれば、そのまま死んでいたはずだ。た  
またま吸った瞬間、致死量に至らないぎりぎりの量のガスがドア付  
近にあり、自分が吸った直後にどこかに流されていった。そんな不  
自然なことが起きていたとは考えにくい。

それに思い返してみれば、倒れる直前の体の熱。

あれはそう、程度は違っても、強い酒を一気に飲んだ時の熱に似  
ているような気がした。

もしかしたら異変の原因となった物は変わらずここにあるが、体  
が慣れて処理できるようになったのかもしれない。気持ち悪いほど  
に急激に調子を取り戻している体を確認しながら、そんな予感がし  
た。それと同時に、もしかしたら体質が合わず、そのまま目覚めら  
れなかった可能性があったことを考え、ぞっとしたのだった。

いつまでも玄関に座り込んでいても仕方ない。

外に出ようとしていたことを思い出し、将貴は立ち上がった。

軽い足取りで外に踏み出し、飛び石を踏みながら正面にある門へ  
と向かう。

（やっぱり何もないな）

本来であれば門の向こうには向かいの家がすぐ見えるはずだった  
が、今では影も形も無い。あるのはちょっとしたスーパーの駐車場  
程度の広さの広場と、それを囲むようにして広がっている森だった。  
近づいてみると、どうやら敷地の境界で途切れているわけではな  
いことが分かる。考えてみれば当たり前なのかもしれないが、旗中  
家というエリアが森になっていないのではなく、森になっていない  
エリアにたまたま旗中家の敷地があったというのが正しいようだ。  
敷地の外側、舗装道路も1車線程度の幅は残っていることが確認で  
きた。

境界線を目でなぞるうち、あることに気付く。

「これは……円、かな」

緩やかな曲線を描いている境界線は、無作為なものではなく、綺麗な弧を描いているように思われた。

今いる場所から見える範囲では中心がどこなのかは確認できないが、始めの予定通り家の周囲を回るとき、ついでに境界線を追ってみることにした。

「はあ、どうしようか……」

将貴は塀にぽっかり空いた穴を目の前にして、ひとりごちた。

境界線が土塀の一部をまたぐ形になってしまったため、途中で欠けてしまっていたのだ。正方形に近い敷地は、円(？)の中に綺麗に収まらなかったようで、角の部分に1m程の穴が開いてしまっていた。

もしかしたら危険な野生動物がいるかもしれない。出来ることから塀はちゃんとした形で残っていて欲しかったのだが。

「考えても仕方ないか。後で適当に土嚢でも作って積んでおこう」  
確か布袋が結構余ってたな、と呟きつつ、先へ進むことにする。

一人で土嚢を作ることを想像するだけでうんざりするが、自分で出来る程度の補修は怠らない方がいいだろうと考え、同じような破損を見つけたらなるべく覚えておくことにした。

簡単に周囲を回った結果、周囲の様子をある程度把握することができた。

まず、境界線は大雑把に見た限りでは当初の予想通り、ほぼ円状に引かれているらしい。中心点を調べるのは後回しにしたが、恐らく正門から向かって左手側にある庭のどこかを中心としていると思われる。直径が敷地の対角線より若干広い程度なので、入りきらなかった反対側の2角が欠けていたことが分かった。

正門のある側を除いた三方は森になっている。少し入って見た限りではしばらく続いているらしく、そこまで樹木の密度が高くないにしても、奥まで見通すことはできなかった。木々の高さは30m

ほどはありそうで、2階に登った程度では枝葉が邪魔をする分むし  
る近い距離までしか見えない。それぞれの方角に何があるかについ  
ては、それなりの準備を整えてから探索しに行くことにした。

正門側にある広場は、脛ほどの高さの草が一面に生えているが、  
日当たりも風通しも良く、昼寝をするには絶好のロケーションと言  
えた。後でハンモックなどを起きたいなと、呑気なことを考える余  
裕はできてきた。何より広場の反対側から、川が流れているのを見  
つけられたのが大きかった。一番の不安が飲み水の確保だったため、  
当座の不安は解消できた。食料は保存食が数日分あるので、あとは  
釣りか、罾で何か獣を捕まえるしかないかと考える。

些細なことではあるが、正門側に広場やら川やらがあるおかげで、  
利便性の面では助かるな、というのが将貴の感想であった。

とりあえずは、周囲の地形確認と飲み水の確保をするだけで、日  
が傾きかけている。

案の定電線は途中から寸断されており、灯りを確保することは出  
来ない。懐中電灯はあるが、なるべく電池は節約したい。日が暮れ  
た時点でさっさと寝ることにして、明日はもう少し遠出を試みてみよ  
う。

そう決め、今日は準備のために家へと戻ることにした。

### 03話 復調（後書き）

01話、02話は連載の投稿の仕方の確認もあったので短めだったのですが、今回から少しボリュームを増やします。

投稿済みの話についてもちよつと物足りないので、もうちよつとエピソード入れようかとは思っています。

今のところファンタジー要素皆無の漂流物っぱいですが、そろそろ話を動かしていきますので、もう少々お待ちください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7976z/>

---

レギオンの将

2011年12月27日00時46分発行